

CONTENTS

文化庁月報

1995 **3** No.318

特集●有形民俗文化財の保存と活用

浜小屋が消えていく

福田 進 16

上州小正月ツクリモノ収集のころ

阪本英一 18

■座談会 民俗文化財を現代生活にどう伝えるか

(石原義剛/鎌田久子/向山勝貞/真島俊一/上江洲均(司会)) 4

中国を訪問して

遠山敦子 20

都道府県のページ

ご存じですか? こんな文化財㊟

加茂の大クス、祖谷のかずら橋、脇町南町 24

一度は行きたい博物館・美術館㊟

木造町縄文住居展示資料館 27

法人紹介～文化に息吹を～

21世紀に向けた情報化社会の環境づくり

(社)コンピュータソフトウェア著作権協会 30

人間国宝を訪ねて㊟

山口五郎 (尺八)

聞き手/高田都耶子 32

ACA(Agency for Cultural Affairs)NEWS

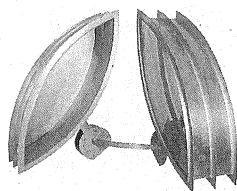
・「歩き・み・ふれる歴史の道」のシンボルマーク決定 …35

・重要文化財の新指定・選定(建造物) ……35

イベント案内

「木の建築と都市」/国立国際美術館 ……41

- 著作権法利用講座㊟ ……34
- 芸術文化振興基金ニュース …46
- 今月の国立劇場 ……47
- 編集後記 ……48



Untitled (平成5年度文化庁買上作品)
谷口真紀/作

たにぐち・まき/昭和40年徳島県生まれ。63年から大阪・京都・東京で出品、個展を開催。平成4年京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。翌5年より神戸学院女子短期大学非常勤講師。平成5年「次代を担う作家展」大賞。現在は無所属。

中国を訪問して

文化庁長官
遠山敦子

昨年の十一月二十八日から十二月三日の六日間、私は文化庁中国訪問団の団長として、北京、西安、上海の三都市を訪問した。

文化庁は、平成三年度より、中国の文化財行政を所管している国家文物局との間で、毎年交互に長官・局長の相互訪問を行っているが、今回の中国訪問も、一昨年の内田弘保前長官の訪中に続き、中華人民共和国国家文物局の張徳勤局長のお招きにより実現したものである。

訪問団は、私のほかに、渡邊明義文化財鑑査官、竹下典行伝統文化課文化財保護企画室長、野田敏明総務課課長補佐、実戸多門宮城県教育委員会教育次長の計五人である。

私にとって、中国訪問は今回が三回目になる。過去の二回は、国際学術課長の時、日中両国の学術交流を促進するねらいをもっての訪問であった。

今回の訪問は、わが国の文化の発展に大きな影響を及ぼした偉大な国、中国の、文化財を担当する政府関係者と親交を深めるとも

に、その優れた文化財と、その保護、活用の有様に接するためであり、これまでの中国訪問とは異なった期待を抱いて赴いたのだが、期待に違わぬ成果を得ることができた。

それでは、中国滞在の日々を辿ってみたい。
十一月二十八日

午後、北京空港に着き、まず、中国政府文化部を訪問し、劉徳有副部長と会見した。

劉副部長は親日派としても有名な方で、お話を伺ううちに、日本文化に対する深い造詣と愛着を持っていることが窺えた。驚いたのは、私は千宗室氏の今日庵を訪れたことがあり、そこに飾られていた立派な漢俳が印象深かったので、記憶に留めていたが、それは、実は劉副部長が詠まれた自筆のものであることが会話の中で判明したことだった。

劉副部長からは、文化部の組織と仕事の内容の説明や、日本に倣い、「人間国宝」のシステムを検討中であるとの話があった。
次いで、今回の主たる訪問先である張徳勤

国家文物局長と会談があった。張局長は、台湾との間で博物館交流を進めるべく、当日まで台湾を訪問されていたが、私共が来日するというので、台湾の後米國を訪問することであり、中国側の日本の文化庁に対する関心の高さに感激したことである。

改革・開放政策以前の中国には、自国の文化財を外国に紹介したり外国と研究協力すべきでないという考え方が支配的であった時期もあったと聞いていたが、張局長によれば、そのような考え方は少数派だが、なお存在するという。しかし、張局長は、このような意見の人とは反対の立場であり、自国の優れた文化遺産は、同時にまた人類共通の文化遺産であることを繰り返し強調された。これは、まさにわが国が世界の文化遺産の保存の国際協力を進める考え方と一致するものであり、



張徳勤国家文物局長と

十一月二十九日

午前中、故宮博物院を訪問した。裴煥祿副院長から説明を受けた後、見学させていただいた。故宮博物院は明王朝と清王朝の宮城であった紫禁城を博物館としたもの。故宮は、文字通り古い宮城の意である。七十八万平米の広大な敷地に多数の建造物がそのまま遺っており、黄褐色の瓦の屋根を持つ大きな建造物群は、まさに偉容である。朝廷の重要な儀式が行われた太和殿の巨大な柱、びっしりと描き詰めた豊麗な装飾に、強大な権力と高い芸術的水準を理解し、保和殿の階段に施された一枚岩の大理石の巨大な彫刻（レリーフ）には、ただ嘆息。保和殿は、科挙で上位の成績者を皇帝が直接口頭試問する殿試を行った御殿で、特に殿内に入ることができ、巧緻な造作を仔細に見ることができた。博物館の所蔵文化財は百万点にも及び、その中から展示が行われている。書画館では、書や絵画の原本と模本の作品の比較展示があり、地方の博物館の若い専門家達が熱心にノートをとりながら勉強している姿に興味を引かれた。

午後、国広道彦在中国日本大使の御招きがあり、張局長も出席され、広く日中の文化の問題について闊達な意見交換が行われた。昨年八月にオープンした敦煌石窟文化財保存研究・展示センターの運営や、文化庁、東

京国立文化財研究所が敦煌研究院との間でやっている敦煌文化財の共同研究などに話題が及んだ。現在、敦煌の管理は甘肅省が行っているが、敦煌市が自ら管理したいと希望しているという。しかし、市に管理が移ると、観光に重点が移るおそれがあるので、国家文物局としては反対しているといった話も聞くことができた。わが国におけるのと同様、文化財保護と観光との調整は難しい課題である。次に、中国歴史博物館を訪問した。博物館の建物は、中国が誇る十大建築の一つで、広大な建物の内部の模様替えをしているところであった。改装中のため、展示は原始時代から南北朝時代までのものにとどまっていたが、杜耀西副館長の御案内で、中国の歴史の奥深さと文化財の質の素晴らしさを目の当たりにすることができた。

十一月三十日

渡邊文化財鑑査官の勧めにより、珍しく残されている道教の廟である白雲觀を見学した。それ程広くない細長い敷地の中に、いくつものお堂があり、金運の神や、薬の神など様々な神が祀られていた。早朝の寒気の中、祭壇にぬかづく若い二人連れを見かけた。

北京空港に向かう途上、短時間であったが、北京日本人学校を訪問し、元気な子供たちに会った。ちょうど食事時に当たり、お母さん

ユネスコを中心として世界遺産などの保存、修復に各国が協力している基本理念でもある。文化庁は、現在、外務省の行う資金協力と連携を図りつつ、中国との間で、敦煌文化財の保存・修復に関する二国間の共同研究、新疆省ウイグル自治区の吐魯番市郊外の集落遺跡である交河故城や、陝西省西安市の唐王朝の長安城の内裏である大明宮の含元殿のユネスコを通じた修復協力など、文化財に関する実質的な協力を行っているが、張局長は、これらに対して心から感謝の意を表していた。

世界四大文明の発祥地でもある中国の文化財は優れた人類共通の財産であり、わが国が持てる技術を十分に生かしてその保存、修復に協力することは、日中友好の新しい時代を拓いていく意味でも意義が大きい。保存修復事業への参加協力は、日本の専門家にとっても得るところが大きばかりでなく、相互理解と連帯の意識の醸成につながるからである。張局長は談論風発の人で、しかも、お話はウィットに富んでいる。フェミニストを自認しておられ、古来の有名な「三従四徳」の説を披露され、つねづね「男は妻や女性を大切にし、女性に従うべし」と職員に説いているとおっしゃったのが、ほほえましくも印象的であった。

達が世話をされていた。同校の校歌は井上ひさし氏作詞、団伊玖磨氏作曲である。

北京空港から西安に飛んだ。国家文物局外事処の陳さんと通訳の殷さん（いずれも女性）が同行してくれた。

十二月一日

まず、西安市の東方に位置する半坡遺址博物館を訪れた。西安では、陝西省文物局の宋振興外事処長と日本語の上手な趙陽君に同行案内いただいた。半坡遺址は六千年前の新石器時代の遺跡である。約一万点の出土品があり、当時の人々の生産手段、技術の発展など、高度な文化的生活の様相を窺うことができる。様々な紋様や絵が描かれている陶器が多数あったが、その中、魚を両手に持つて食べようとしている人を図にした盆が、ユーモアがあり、心に残った。遺跡は五万平米に及び、その一部を建物で覆い、発掘された状態で見せている。集落跡のすぐ近くに子どもたちの集団墓地がある。愛惜の情の現れであるという。甕棺の上部に穴が開いており、魂が天に昇って還ってくるという思想が窺えるということである。

次に訪れた秦始皇兵马俑坑博物館では、まず、雷玉平副館長から説明を受ける。

一九七五年に正式な発掘調査が始まり、七



故宮博物院の保和殿にて

志傑館長の話では、文物管理事務所から博物館に格上になったのは、ここだけという。将来の楽しい抱負も伺った。責任者が皆熟意をもって運営に当たっているのが素晴らしい。

茂陵博物館の見どころは、野外に展示されている十六ある大きな石の彫刻である。自然石の形をそのまま活用し、牛、馬、蛙、怪獣などの動物を彫っている。現代彫刻にも通じるところがあるようにも思った。

午後は、西安に戻り、唐の長安宮の宮城の跡である大明宮址を訪れた。大明宮址は、西安市の管理下であり、胡富民副局長ら市の文物局関係者に、遺址保管所の展示施設、既に整備された麟德殿址と、これから復原作業に入る含元殿址を案内していただいた。

大明宮は六三四年から九〇四年までの二百七十年間の唐の歴史のうち、二百四十年間政治の中心であった。現在の西安市の城壁よりも北に位置し、東西一六九〇メートル、南北二二五六メートル、面積三百五十万平米という壮大なもので、北京の故宮と比較してみても、

六年に博物館建設に着工し、七九年に一号坑、八四年に三号坑そして九四年十月に二号坑の各施設が竣工、開館している。

一号坑の兵馬俑は、わが国の展覧会に出品され、テレビや写真等を通じての紹介もあり、我々にもなじみがある。等身大といっても現在の人間でも長身に当たる一八〇（一九〇センチ）もある兵が縦に隊列を組んで、東方を睨み据えているのは圧巻である。他方、三号坑の兵馬俑は司令部であり、兵は四方に向かって配置されている。彩色のよく残った俑が出土しているとのことであり興味を深くした。

二号坑は発掘現場である。通常、発掘途中のものは公開しないが、ここでは一般公開している。二号坑の発掘調査には、これから七年を要するとのことであった。二号坑では、王清文陝西省文物管理局長に案内いただいた。通常は降りることが許されないという発掘現場に立ち、詳細な御説明を受けた。

八千体もあるという兵馬俑、しかもそれぞれの表情が異なるという当時の人々の表現力と技術の見事さは驚き以外の何ものでもない。学術調査を進めながらその状況を多くの人々に見せるということは巨大施設があつてのことだが、関係者の勇気ある試みに私は大きな感銘を覚えた。教育的効果も大きいのではないかと思う。

その規模の大きさが想像できる。

大明宮の含元殿址は、基壇の版築も崩れ落ち、丘のような状態になっており、頂に柱の礎石が一つだけ遺っている。わが国はユネスコを通じてその修復に協力することとしており、奈良国立文化財研究所から専門家が参加している。修復は基壇部分についてのみ行う計画で、第一期が一九九七年まで、第二期の完成が九八年の予定である。文化庁は、平城宮跡に朱雀門、大極殿、東院庭園の復原に取り組んでいるが、含元殿址は基壇部分だけとはいえ、規模が大きいので大変な修復作業になる。このような重要な事業に、わが国として協力し、日中の友好の実を挙げられるのは実に素晴らしいことであると思う。

この日の夜は中国最後の夜であったが、思いもかけず、西安市の方々の御招待を受け、大いに親交を深めることができた。

十二月三日

帰国途上、当初の予定より早い便で上海に立ち寄る。上海はトランジットだけの予定であったが、これも特別の計らいで、上海歴史博物館の顧祥虞副館長の御案内により、上海歴史博物館を見学させていただいた。

上海歴史博物館は、現在、別地（競馬場跡）への移転改築を進めている。既に建物の外装を終え、目下、内部の展示設備工事にかかって

西安に戻り、陝西省歴史博物館と碑林を訪れた。

陝西省歴史博物館では、陳全方館長に御案内いただいた。収蔵品は三十七万点と豊富で、陶俑と青銅器は中国で最も多数を蔵しているという。また、当館ならではの収蔵品に唐代の墓壁画があり、その展示も行われていた。

この博物館の建物は、唐代風の建物配置・様式を模した素晴らしいもので、四年前に完成した。東京国立博物館の約二倍の規模と最新の設備を誇っている。中国の力強い文化政策を見る思いがした。

感動の冷めやらないまま、当日の夜、陝西省の要人達と会うことができた。

王清文局長は、張国家文物局長の話の中で、優れた指導者の一人として紹介されていた方だが、そのとおり、文化財保護に関する熱のこもった建設的な意見が縷々述べられ、大変さわやかな印象を持った。中国においても、開発行為と発掘調査との調整、発掘経費の確保が大きな課題となっている。

関連な意見の交換に、時のたつのも忘れるほどであった。

十二月二日

まず、西安の西方、漢の武帝の陵墓である茂陵へ向かう。隣接して武帝の家臣霍去病の墓があり、その麓に博物館が設けてある。王

おり、一九九六年に公開予定である。ハイビジョンや最新のメディア機器を導入した展示が計画されている。

今回の訪問は、極めて短期間であり、しかも、北京には丸二日間しか滞在しないという日程ではあったが、張徳勳国家文物局長と三回親しく会話し、率直に意見を交わし、信頼関係を深めることができた。その過程で、日中の文化と文化政策のあり方について貴重な情報交換を行い、今後の両国の文化財の国際協力を進めていくうえでの礎を築くことができたと感じている。

また、張局長の御高配により、北京、西安、上海のそれぞれの地において、文化財関係者と歓談し、博物館、第一級の遺跡等を十分視察する機会を与えていただき、中国の歴史の奥深さと、質量ともに優れた文化財に接することができ、大いに学ぶところがあった。

中国とわが国とは一衣帯水とよくいわれるが、文化財保護に対する思いは同じであり、良きパートナーとして、信頼を深め合い、今後さらに協力関係を強めていきたいの思いを新たにしたい。そして、文化財を通じての国際協力が、両国の国民の相互理解をさらに促進することにつながればと念じる次第である。

3月文化庁行事予定

- 14日・第6回国語審議会総会（東條会館）
 17日・文化財保護審議会（文化庁）
 22日・芸術選奨等受賞式、受賞記念パーティー（赤坂プリンスホテル）
 23日・著作権審議会使用料部会（虎ノ門パストラル）
 23日・著作権審議会総会（虎ノ門パストラル）
 29日・松尾芸能賞受賞式（東京・全日空ホテル）

文化庁月報 3月号（通巻318号）

平成7年3月25日印刷・発行

編集—文化庁

〒100 東京都千代田区霞が関3-2-2

発行—株式会社ぎょうせい

本社 〒104 東京都中央区銀座7-4-12

本部 〒167 東京都杉並区荻窪4-30-16

電話 編集 03(3571)2126

販売 03(5349)6666

振替口座 00190-0-161

印刷所—㈱行政学会印刷所

定価530円（本体515円）送料76円

年間購読料6360円

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先

㈱ぎょうせい営業第一課宣伝係

電話03(5349)6657（ダイヤルイン）

©1995 Printed in Japan

ISSN 0916-9849



編集後記

予想をはるかに上回る惨事となった阪神・淡路大震災。新聞等でその被害状況が明らかになるたびに、現地の方々に対し、深くおくやみの念を申しあげておりましたが、読者の皆様方、そして親戚等の方々に被害はありませんでしたか。また、今回の震災で文化財や文化施設もかなり被害を受けたようですが、一日も早く復旧措置がなされることを祈願してやみません。さて、今月号は有形民俗文化財についての特集を組みましたが、一見地味に見える民俗文化財も、いろいろ探っていくと、それぞれに地域固有の文化の特色が色濃く残っていて、国宝や重要文化財等とは違った、美に味わい深い良さが発見できます。例えば、秋田県の八郎潟漁撈用具や、庄内（山形県）の木製酒器コレクション、能登（石川県）の揚浜製塩用具などは、見ているだけでもあきません。ただ残念なのは、これらはいずれも、今日では博物館等でしか見られなくなっているということです。今後、その保存と活用を図っていく中で、民衆世界において永く守り継がれてきた「田舎臭さ」をどこまで保ち続けることができるのか。今後の対応が待たれるところです。（栗）